釧路市まちづくり基本構想シンポジウム　～つながる　まち・ひと・みらい～
講演録

実施日時　平成２９年１０月１０日（火）　１３時３０分から１６時
第１部　報告「釧路市まちづくり基本構想の策定について」
報告者　蝦名　大也　（釧路市長）
コメンテーター　小磯　修二　氏（前釧路公立大学学長、策定市民委員会委員長）

第２部　パネルディスカッション
「釧路市のこれからのまちづくり　～域内連関が築く開かれた信頼社会～」
モデレーター　小磯　修二　氏（前釧路公立大学学長、策定市民委員会委員長）
パネリスト　西村　毅　氏（釧路市連合町内会会長）
畑　由規子　氏（三ッ輪運輸株式会社総務部総務課課長）
川前あゆみ　氏（国立大学法人北海道教育大学釧路校准教授）
夏堀めぐみ　氏（クスろ代表）
沼尻　智成　氏（釧路信用金庫経営企画部地域力創造グループ）

第１部　報告「釧路市まちづくり基本構想の策定について」

〇蝦名市長
釧路市まちづくり基本構想シンポジウムにご参集賜り、心から感謝を申し上げます。
本日は、策定委員会の委員長でございます小磯先生をはじめ、委員の方々にも出席いただいております。本日は策定の経過も含め、この基本構想の概要をご報告させていただき、まちづくりに向けて意識を共有する場面にしたいと考えています。
まず、まちづくり基本構想の位置付けです。釧路市には様々な計画や事業がありますが、その最上位が、まちづくり基本構想でございます。
続きまして、策定の経過です。これまでの総合計画は１０年単位で目指すまちについて、人口議論も踏まえながら進めてきました。今までは法のもとで、つまり、国からこうしなければいけないという義務があるなかで総合計画が策定されてきましたが、地方分権改革によって、この策定義務がなくなりました。しかし、どのようなまちを目指していくのかを行政、そして市民が共有してまちづくりを進めていかなくてはいけないということで、一昨年策定した釧路市まちづくり基本条例に基本構想の策定について明記しました。
このまちづくり基本構想には、これまで推進してきた「釧路市都市経営戦略プラン」や、「釧路市まち・ひと・しごと創生総合戦略」などを組み入れています。その基本構想のポイントをまとめますと、市の最上位の指針である点、まちづくり基本条例に基づく初めての策定である点、市民が主体のまちづくりを目指している点、都市経営ということで、このまち

の中にあるモノ、全てが財産で資源であり、これを生かしていくという点、そして、人口減少を見据えた策定である点となります。

次に、策定体制をご説明します。市役所内部の組織では、私をトップとした基本構想会議や幹事会、作業部会。あわせて、まちづくりの指針であることから多くの方にご参加いただくために市民委員会の開催に加えて、旧釧路市はもちろん、阿寒、音別の各地域協議会、さらには、福祉や教育など、様々な分野の審議会などの場面でも話をさせていただき、延べ千人を超える方々にご意見をいただきながら策定してきました。そのなかで小磯先生に委員長を務めていただいた市民委員会は、様々な団体から推薦された２０名でご協議いただいています。この委員会については男女各１０名で構成しており、お子さんのいる方にもご参加いただいています。実際に、市民委員会にもお子さん連れで来ていただいて、お子さんが泣いて「あら、どうしましょう」という場面もありました。その後は託児の環境を整備したわけですが、このように実際にまちで暮らしている方々に来ていただいて、委員会を行ってきました。

さて、釧路市が抱えている課題についてご説明させていただきたいと思います。まず、人口ですが、平成１７年の１９万人から平成２７年の１７万４千人まで減少しています。「釧路市まち・ひと・しごと創生総合戦略」では、平成５２年には人口が１０万６千人になってしまうところを、３万２千人プラスの１３万８千人を目指しています。この人口減少に関しては、人が様々な経済活動や生活を行う状況で、１００人が８０人に減少した場合、全体的な規模で考えると消費額が下がるなど、人口減少にともなう消費低下や経済活動の縮小などが懸念されています。そこで、アクティブシニアという言葉を出させていただいたところです。この言葉の定義は、健康で就労や社会活動への意欲のある高齢者であり、高齢化社会の中で、経済・社会の担い手として健康に様々な活動を展開していただきたいと考えています。

続きまして、人口減少の大きな原因として、この表を見ていただきますと、全人口を５歳単位に分けた年齢階級別人口移動の状況を示しています。ゼロを超えると転入、下回ると転出ということで、５年後にその年代の人口がどうなっているかを示しています。この大きく減少している部分は１５歳から１９歳の方が２０歳から２４歳になるまでに一番転出超過になっていることを示しています。なぜその年代が転出超過かを考えてみると、進学もありますが、働く場所が無いことが最も大きな理由でした。この転出超過を改善していく対策が必要であることがグラフから見えてきます。市民委員会でも、一度都会に出て行った方々の「地元に帰って来て働きたい」といった気持ちを大切にすることが重要だというご意見をいただきました。

次は、経済産業ですが、年間消費販売額と人口一人あたりの販売額の推移は、ご覧のとおりに徐々に下がってきております。これは景気の動向による影響もあります。また、社会の情勢の変化から、今はインターネット等々で、購買する方々も増えてきていることで、地域でお金が循環しないこともあるかと思います。平成２１年に策定いたしました釧路市中小

企業基本条例では、域内循環を進めること、外貨の獲得を進めることを柱にしています。策定時の釧路市の状況をみますと、釧路市民が釧路市含め管内から物を購入している割合が６０％にいかない、つまり４０％以上が、域外から購入している状況だったわけです。ですから、地域の中で財を循環させていくことを課題としています。

続いて、一般求人と充足状況の推移です。求人は増えてきていますが、充足率は低下しています。特に、建設業や介護のような住民生活を支える大切な分野でも、人手不足の大きな影響が出ているということです。こうした情報も皆さんと共有しながら、必要な知識や能力などの獲得を進めて行くことも重要です。

次が、釧路市への愛着です。これは、本当に高くなってきていることを非常にうれしく思っております。昔、小磯先生に社会人ゼミで習ったときの道民の意識調査では、釧路根室管内の満足度が一番低かったのですが、おかげさまで、この満足度が上がってきて、まちに対する愛着が非常に強くなっています。こういった高い意識のもとで、一緒にまちづくりを進めていくことが重要だと思います。こうした素地が釧路市にあるということも重要なポイントになると考えています。

次は、安全安心という観点から、様々な自然災害についてまとめております。釧路市は地震や火山の災害が多いことから、地域の強靭化ということで、自然災害に強く、しなやかなまちづくりを進めることは大きな課題です。

そして、いつもお話しさせていただいている釧路市の財政状況についてです。この左上の市税と地方交付税をご覧ください。少し乱暴な言い方ですが、この２つを合せ一般財源と考えていただきたいと思います。今までは市税と地方交付税の両方を合算していくらあればよいという考え方でした。しかしながら、今、国も地方交付税について見直しを行っており、昔のように税収が足りないときには地方交付税で全てを賄ってもらえる時代ではなくなりつつあります。つまり、本来必要な地方交付税が交付されず、トータルで収入が下がってくることが課題になります。そこで、市税を増やすことで地方交付税が少なくなってもトータルで収入を増やす取り組みが重要です。

これまで説明したような課題を解消していくために、目指すべきまちづくりを掲げています。誰もが健康で安全なまちで生まれ育ち、生きがいをもって暮らしていただく。また、この地域の強みをしっかり出していくことが、これからの目指すべきまちづくりにつながってくることをご理解いただきたいと考えています。

続きまして、目指すべきまちづくりを実現するための考え方ということで、まちづくり基本構想の大きなキーワードとして「域内連関」を掲げています。これまでお話しました人口減少などの取り巻く状況、様々な考えがあるなかで、やはり人のつながりが希薄になっているのではないかと思います。しかしながら、災害があったときなど、様々な場面で地域の住民同士が助け合うことが重要である。これもまた、同様に誰もが感じているところではないかと思います。こういった点から、人と人のつながりの大切さを再認識しながら構築することに取り組んで行くことが重要になると思っています。しかしながら、何もないところで突

然つながりを持つことが難しいのはご案内の通りです。ですから、たとえば町内会のお祭りや避難訓練などに多くの方々にご参加いただくなど、日頃からつながりを意識して進めて行くことが重要です。

次は、今進めている域内循環です。これもつながりに大きく結びついてくるものです。先程もお話ししました中小企業基本条例の域内循環です。やはり、地元のお店で物を買う、地元でつくられた物を買うということを日頃から意識しながら域内で循環させていく意識を持つことが大切です。平成２１年から、この域内循環をベースにしながら様々な取り組みを心掛けてまいりました。買い物のみならず、様々な分野にこの考え方を広げることが重要だと考え、基本構想では、同じ課題や目的に取り組むことで、日常的な活動からつながりや信頼関係を築いていくことを目指していきます。

この同じ課題や目的を目指すことで地域のつながりを強める考え方を域内連関と名付け、市の最上位の指針である基本構想に位置付けています。この域内連関をご理解いただきたいと思っています。ここで域内連関のイメージについてお話しさせていただきます。このイメージを見ていただくと、色々な分野が関係し合って地域が成り立っており、日頃の取り組みが様々な分野につながっていることがお分かりになるかと思います。行政は整理整頓されていて、いわゆる縦割りですが、現実にはひとつひとつリンクしている、つまり、関係性を持っているということです。

次に、「観光振興」をテーマの具体例としてご説明します。観光振興に交通や自然、広告など様々なことがリンクしており、ひとつのテーマにつながりを持って取り組んで行こうという考えです。その下の「子どもを育てる」のテーマについても同様で、ありとあらゆる、地域も学校も自然も家庭もですが、すべてが連関しつながっていることが域内連関という考え方です。これをしっかり進めることによって、地域への満足度、愛着度がさらに高まると考えています。

次に基本方針について、５つの視点を掲げております。これまでの総合計画では、行政の組織に沿って議論を進めていましたが、今回は「育てる」「働く」「暮らす」といった市民の生活をキーワードに作成しています。そうすることで様々な横軸が入ってくるわけです。そこで基本方針１から５まで、未来を担う子どもを育てるまちづくり、すべてのひとが活躍できるまちづくり、地域の経済と産業が雇用を支えるまちづくり、誰もが安全に安心して暮らせるまちづくり、そして、自然と都市とが調和した持続可能なまちづくりを掲げているところです。ここに先程ご説明した域内連関を盛り込みながら進めていきます。

続いては重点戦略ですが、経済活性化を主軸として取り組んでいく内容です。まちの活力を高める経済活性化戦略、地域経済を担う人材育成戦略、そして経済活動を支える都市機能向上戦略とし、様々な取り組みを進めます。なぜ、経済活性化を主軸にしたかをご説明します。経済と言いますと、数字や効率などをイメージされる方が多いわけです。都市経営戦略プラン策定時にも、「行政が経営なんて変ではないか」といったお話もいただきました。しかし、経済という言葉は経世済民、国を救い、あるいは治め、民を救う、このような熟語に

由来しています。そういった意味で、経済のことを真剣に考えることは、まさに地域を守っていくことにつながるものです。私が好きな言葉で、二宮尊徳の報徳思想の中に、「経済無き道徳は欺瞞あり、道徳無き経済は犯罪である」というものがあり、経済は決して数字や効率だけではないと考えています。

では、経済以外は軽視するのかというとそうではありません。この重点戦略のイメージを見ると、基盤に教育・文化・福祉・医療・防災等々と記載しております。これは、まず安心な地域社会がベースとなることを示しています。そのうえで、経済活性化を進めるために大切な人材育成、そして都市機能の向上に取り組むことで好循環につなげていくことが、これから重要であると考え、重点戦略を定めています。ぜひとも、この考え方もご理解いただきたいと思っています。

そして、これは３つの戦略の関係性ですが、この重点戦略の策定には庁内２０課の職員による作業部会を作り、そのなかで議論、検討を行いました。そして、その作業部会の意見に対して市民委員会からご意見をいただきながら重点戦略をまとめていきました。基本構想が策定された際には、どこかの部署で進めていることを他の部署は何も知らないということがないように、常に情報を共有して、一体で取り組むなど、３つの戦略の関係性を大事にしながら進めていきます。

次は分野別施策ですが、これは先程の基本方針に基づいて、各分野の取り組みを進めていく部分で、これに対して重点戦略が横串になります。それぞれに分野横断的な横串を入れながら進めていくという考え方です。

最後のメッセージですが、人口が減少する中で、社会や経済の変化する速度は増しており、将来を見通すことが難しい状況です。だからこそ、やはり幅広い視点と意思を持ってまちづくりを考えることが重要になってきています。ここに市役所・市民・企業・団体とありますように、みんながまちづくりの主体として、まちづくりの考え方を共有し、まち・ひとのつながりを持って持続可能なみらいを目指すために、釧路市まちづくり基本構想を策定いたします。ぜひ、同じ目標、同じ視点に立ちながら、着実にまちづくりを進めるために、ご協力いただければありがたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

○小磯　氏

今回まちづくり基本構想策定市民委員会の委員長としてお手伝いさせていただいた小磯です。今日はシンポジウムの第１部では、コメンテーターとして参加させていただきます。私自身の釧路とのお付き合いは大変長いものがあります。私の活動の専門分野は地域の開発政策、地域の活性化ですが、もともとは国の政策現場で国土計画とか、北海道の地域のプランニング、計画づくりが活動の主体でした。そのような経験からまちづくり基本構想という長期の計画を地方の自治体が作ることの意味について最初に申し上げておきたいと思います。最近、計画なんかいらなのではないかといわれることがあります。ある意味、確かにそうで、ある自治体では作るだけ作って、作りっぱなしなところもある。ひどい場合は役所

の中でも、作った企画部門だけが知っていて、他の部署は情報もない。そんな計画なら作らない方が良いと思います。

ただ、私自身は特に人口減少、先を読むことが難しい時代になればなるほど、長期のプランニングを地域からしっかり構築して、共有しておくことの意味がますます強くなってきていると思います。例えば、家庭や企業ではどうでしょうか。どういうところを目指して、この家庭はやっていく、この企業はこういうところを目指していくという長期の目標を共有している組織は強いと思います。目の前にあることだけに立ち向かうことになってしまうと、結果的に違った方向に行ってしまうこともあります。特にこれから人口が減少し、基本的に地域の経済活動が縮小していくなかで、効率的な行動が必要な時代においては、長期の計画、ビジョンを共有していくことが、非常に大事な意味があるのではないかと思っています。

釧路市というのは総合計画の歴史が長く、最初につくったのは１９６３年ですから、それから今の計画に至るまで計画を続けてきている。そういうなかで、市長自らが、今回の基本構想について思いを込めて説明されておられる姿を見て、改めて今回の計画の意味を考えてみました。蝦名市長が就任されたのは、前の市長による計画がつくられた直後の２００８年の１１月で、そこは市長として今ある計画を守りながら、政策を進めて行くという決断をされた。実は、そのとき釧路市は非常に厳しい状況に追い込まれていました。そのなかで色々な政策を積み重ねてきた集大成が今回のまちづくり基本構想ではないか、というのが私自身の思いです。そのような思いで私は聞いておりました。このコメントに尽きるのですが、それだと私の役割にならないので、先程市長が説明されたスライドをお借りしながら、コメントしていきたいと思います。

最初に、今回のまちづくり基本構想が継承した取り組みとして都市経営戦略プランの紹介がありました。また、まちづくり基本構想のポイントの４番目に都市経営の視点による初めての策定というコメントがありますので、この話を最初にさせていただきたいと思います。蝦名さんが市長になられたとき、当時の土地開発公社、振興公社が多額の負債を抱えているという大きな問題に釧路市は直面していました。その直前には夕張の問題があり、釧路市の１５０億円近い巨額の債務についても先送りにはできないということで、私自身もこの問題の勉強をさせていただき、蝦名市長に申し入れをして、この債務の処理がスタートした直後でした。その時に蝦名市長から、負債の処理も大事だが、それだけで本当に将来に向けて明るいまちづくりが進めて行けるのだろうかと相談を受けました。それは、最少のコストで、つまり、お金をかけなくても、こんな仕事ができるのではないかという前例踏襲にこだわらない思い切った発想で仕事をしていく、都市経営という政策に取り組めないだろうかという内容でした。それで都市経営戦略会議という会議を釧路公立大学、私は地域経済研究センター長でもあり、学長でもありましたが、一緒にお手伝いをすることになりました。そこには市長にも議論に入っていただいて一緒に取り組んでいきました。その経験は、先程蝦名市長がお話しされた様々な取り組みの基礎になっていると思います。したがって、都市

経営の視点による政策が釧路市の大きな特徴であり、域内連関、域内循環の考え方はそこが源流だと思います。思い起こしますと、当時、どういったことが都市経営かというところから議論が始まりました。まず、前例にこだわらないということで、全国には１７００を超える自治体があるから思い切ったことをやっている自治体があるだろうと考え、蝦名市長と一緒に全国の先端的な自治体をまわりました。例えば、債権処理であれば、兵庫県の芦屋市が先進地なので、実際に視察に行って勉強しました。そのような様々なことを積み上げたのが都市経営戦略プランです。この考え方は釧路市にとって転機になる大きな動きだったと思います。その都市経営の視点で、今回のまちづくり基本構想が策定されていることをコメントとして申し上げたいと思います。都市経営の視点が何かをあらためて述べると、前例踏襲ではない新しい発想で打ち向かって行くことであり、その背景にある考え方は最少の経費で最大の効果を得ることです。これは、地方自治法上の目的にも書いてあります。しかし、ややもすると行政の仕事は与えられた予算をいかに使うかという思考になりがちですが、そこにコスト意識を持ち込んでいこうと考えました。負債の処理という極めて厳しい状況から生まれてきた都市経営という理念がまちづくり基本構想の基本的な考え方になっていると思います。

それから、まちづくり基本構想は、行政内部の議論と同時に、策定市民委員会によって議論を進めていることが紹介されました。この策定市民委員会、この後のパネルディスカッションでもメンバーの方々と一緒に意見交換していますが、私も様々な計画作りの委員会に参画しますが、今回の市民委員会では初めてのことがありました。まず、男女比が１０人１０人とまったく同じで、委員が非常に若い世代から私のような高齢な世代までと幅広く、大変新鮮な意見交換、議論が展開されました。そこから生まれてきたものが基本構想の多くを占めていることをご紹介しておきます。

さて、市長の説明で人口減少という問題が提起されました。これから１０年の長期計画を考えていく上で、人口減少にどう向き合っていくのかという一番重いテーマの意味を私なりに考えてみたいと思います。まず北海道はいつから人口減少が始まったかというと、実はもう２０年が経ちます。日本全体の人口減少は約１０年ですが、それ以前に人口減少時代に入っているわけです。では、釧路はいつからかというと、確か昭和５８年ぐらいからです。だから、生まれてきた子どもが成人を迎え社会人になっていて、その人はずっと人口減少時代に暮らしているわけですから、もう少し冷静に人口減少に向き合っても良いのではないかと思います。人口減少時代はやはり経済の規模も縮小していきます。内需が減るわけですが、内需は経済の源です。それが減る時代ですから、大変厳しい時代であることは間違いありません。ただ、私が若い頃は高度成長期のように放っておいても成長する時代ですから、別に何を目指すということを強く意識しなくてもやっていることが良い結果をもたらす時代でした。しかし、人口減少時代は、何を目指すかという戦略的な意識、意図を共有しながら進めていくことが重要です。人口減少時代だからこそ、共有されたまちづくりの目標を、みんなでしっかり理解していくことが私は大事だと感じています。

それから、自然減や出生率が小さくなって人が減ることよりも、地方の場合は特に他地域に移動していく社会減の影響が大きくなっています。１８歳の春と２２歳の春、大学進学、社会人として就職する時の若者の移動が一番大きいことです。このことにどう対応していくのかが地方の一番大きな問題だと思います。そういうなかで、私は残念ながら参加できなかったのですが、先週の土曜日、釧路公立大学が設立３０周年を迎えました。当時は国から地方自治体が自前の大学を作ることはだめだというメッセージがあったなかで、釧路市は敢えて釧路公立大学を設置した。でも、結果的には３０年間安定的な大学経営を行いながら、１７万都市の中に常に約１３００人の１８歳から２２歳を中心とする若者が集う「装置」を作ったことは大きな成果だと思います。今、全国的に各地方都市は公立大学を持ちたいという大きなブームとまで言えるような動きが出てきています。私も色々なところで、そのお手伝いをすることがありますが、その時に釧路の話をすると、３０年前にまちづくりの戦略として自前の大学を作ったすばらしい都市ですねという声を耳にすることがあります。ぜひ、それを地域の財産として自覚され、さらに釧路には公立大学だけではなく、教育大学を始めとした色々な高等教育機関がある。そういう高等教育の場を活用していく視点も意識しながら進んでいただきたいと思います。

時間も限られてきましたので駆け足でいきますと、特にお話したいのは釧路市への愛着についてです。これは先程、蝦名市長からもお話がありましたが、私が釧路に１９９９年に赴任したときは、本当にこの地域の定住意識が低かった。定住意識とは、この地域にずっと住み続けたい割合ですが、これが北海道の中でも低い。ところが、隣の十勝地域は札幌よりも定住意識が高い。そのようななかで、当時の釧路の稼ぐ力は高かった。海外との輸出競争力というと、北海道の中で札幌でもマイナスですけども、釧路はプラスの黒字でした。それだけ稼ぐ力を持っているにもかかわらず、地元に定着して住み続ける意識が低いというのは良くないと思いました。結果的に経済的分析を見ても、稼ぐ力はあっても、域内への投資、域内で消費する割合は釧路の人は非常に低かった。そういう辛口のメッセージを当時出していました。それが今は、釧路市は北海道内でも地元への愛着が高くなっている。これをどう読めばいいのか、非常に経済環境が厳しい、市の財政も厳しい、そういう様々な厳しさが増していることで、市や地域への愛着度が高まってきている。だから、大変な厳しさを良い意味で地域のことを考えるきっかけとして、地域に向き合う意欲、意識が高まってきている動きがあると思いますし、それが、今日の後半のメッセージの域内連関というコンセプトにつながっているのではないかと思います。

それから、過去の主な災害に関するスライドについてですが、特に地震災害が多い地域ですから、これらにどう向き合っていくのかも、大きなテーマです。釧路市はまちづくり基本構想と同時に強靭化計画を策定しています。強靭化というと、公共事業のばらまきのようなイメージがありますが、決してそのような政策ではありません。むしろ逆であり、ハードだけではなくソフトな仕組みによって災害に向き合う、そういう地域づくりの政策が始まっています。釧路は、これまで何回も地震に見舞われ、災害に対応する力を持っているという

ことで、そういう釧路の財産もしっかり出しながら向き合っていく。そのなかで域内循環という経済のコンセプトから始まった取り組みとして、地域の中の人びとのつながりを高めていく域内連関によって、災害に向き合う地域づくりにもつなげていこうという議論が強靱化計画でも始まっております。これは、まちづくり基本構想の域内連関というコンセプトとの良い意味での政策的なつながりだと感じています。

さて、この後のディスカッションもありますので、最後に蝦名市長から、人口減少下で策定する釧路市のまちづくり基本構想の意義についてお話がございました。そのなかで、あらためてお話を聞きながら、最初にご紹介をした都市経営戦略プランに向けて一緒に活動した当時を思い出しておりまして、最後に市長にお聞きしたいと思うのですが、市長としてこれまで都市経営の視点で活動してこられたなかで、改めて、まちづくり基本構想に都市経営の視点からどのような政策を盛り込んでいくのか、今後に向けて一言お願いします。

○蝦名市長

都市経営戦略プランは、小磯先生のご指摘いただきながら進めてきました。都市経営においては、先程もお話しましたが、このまちにあるもの全てが資源ということです。経営は、そこにある人材や色々な資源を活用しながらプラス成長、例えば商売であれば売上拡大などを求めていくものです。そういったあるものをしっかり活用し、まちを活性化していく必要性から都市経営が出てきたと思います。ですから、小磯先生には、我慢するための計画では何のためにやっているかわからない、やはり、昨日より今日、今日より明日がプラスになる、そういった希望の持てるまちづくりを進めていくためにご相談をしました。

実際、取り組みのなかでは、このまちの力を強く感じました。先程、お話がございました第３セクターの不良債務の問題、最終的には１３１億円でしたが、この処理のときも、小磯先生に「その時の市長が、課題があることを知っていて、何もしないのは犯罪に等しい」と言われまして、この第３セクターの本質を見て、これは大変な問題だと認識しました。これを解消していこうと、まず課題を明らかにして、新年交礼会などで５分間くださいと言って財政健全化の説明をさせていただいた。ありとあらゆる会合に説明資料を配り、こんなに大きな課題があるから、財政の健全化を進めなければならないとお話をさせていただきました。市民のご協力をいただいて、私が就任した時には、このまちの貯金である１つの基金、そこに４５万７千円しかなかったものが、今は減債基金額が約５８億、財政調整基金が約１０億ありますから、約７０億円の基金を貯めることができて、ある日突然、破綻することはなくなりました。このように、課題を明らかにし、皆さまに理解を得て、協力していただいて成果を挙げることを、一番厳しい財政の問題でできたわけです。楽観的と言われるかもしれませんけれども、私たちが課題を明らかにし、市民に説明しながら、先送りしないで、色々なことを進めていけば、様々な事にも対応できるのではないかと思っており、このことがこれからの都市経営だと思います。まちの全員が社員であり、株主であり、全員のものだと、これがこの釧路の都市経営の考え方だと捉えて、まちづくりを進めていくことが重要だと

考えています。

〇小磯　氏

　ありがとうございました。ピンチをチャンスにという言葉がありますけれども、釧路市の場合、危機的状況を前向きな政策につなげてこられたと思います。あの当時の、今ある課題を先送りせず、しっかり向き合って解決していくという思い、気持ちを忘れないで、引き続きしっかりまちづくりをしていただきたいと思います。時間も過ぎたようですので、私のコメンテーターとしての役割は終わりたいと思います。

第２部　パネルディスカッション
「釧路市のこれからのまちづくり　～域内連関が築く開かれた信頼社会～」

○小磯　氏

それでは引き続きまして第２部のモデレーターを務めさせて頂きます。今日のテーマであるまちづくり基本構想は、市民委員会で５回の議論を重ねてまいりました。先程もご紹介したように、他の地域には無い新鮮な議論が交わされた市民委員会でした。本日は市民委員会を代表してパネラーとして、西村さん、畑さん、川前さん、夏堀さんにご参加いただいております。他の委員の皆様も会場に居られますので、市民委員会の雰囲気を会場の皆さまにもお伝えさせていただければという思いでおります。それから、沼尻さんは釧路信用金庫の肩書ではございますが、市民委員会の事務局として具体的に前向きな提案をいただきました。そういった意味で蝦名市長に代わって今日はパネラーの席に座っている意味合いもあると思いますので、よろしくお願いいたします。今日の流れですが、最初１巡目は、この策定市民委員会にどのような思いで参加されたのか、また、その議論の中で何を感じられたのか、市民委員会に参加した感想を聞かせていただきたいと思います。その後は、今日のパネルディスカッションのテーマである域内連関という、なかなか難しい四文字熟語をどう読み解いていくのかをパネルディスカッションのテーマとして、それぞれの日々の活動、あるいは市民委員会の議論で感じられたことをお話いただければと思います。そんな流れで進めて行きたいと思っていますので、よろしくお願いいたします。それでは、西村さんから順次、発言をお願いしたいと思います。

○西村　氏

まず、この委員会には、地域住民、町内会の代表という立場で参加をしました。そして、そこをベースにして意見等を発言させていただいています。このまちづくり基本構想ですが、来年度から１０年間の基本構想ということで、委員の一人として大変緊張し、重さを感じ、そして責任を感じながら発言をさせていただきました。これまで市民委員会では、様々な課題に対して、様々な角度から検討がありました。釧路市に限らないことですが、人口減少や少子高齢化の急速な進行や価値観の多様化から、この住民の絆、あるいはつながりというものが希薄化してきているのはご案内の通りだと思います。それで町内会はなかなか運営が難しい、それから活動も以前に比べたらスムーズにはいかなくなってきたという現状にありますが、「うまくいかないので、何もできない」と止めてもいけませんので、今までの町内会の在り方、役員、行事等などを考え直していかなければならないと思っています。今日のこの域内連関に関連して、やはり新たな仕組み、スキルも含めて、何か考えていかなければならないと強く感じています。

少し町内会の状況を報告させてもらいますが、釧路市には５０７の町内会があります。そしてブロック毎に４１地区の連合町内会があり、釧路市連合町内会という組織になってい

ます。色々な課題がありますが、身近なところでは交通事故、あるいは青少年育成の問題、そして防災や地域福祉の問題等々、課題が山積しています。特に、子どもの育成、少子化のなかで時代を担う大事な子ども達が安全で安心して学習や生活ができる環境を作っていなければならない。あるいは防災や福祉の問題についても色々な課題がありますが高齢者の独り暮らしの見守り、さらには、防災に対する考え方が町内会として大きな課題になっています。これらの課題等について町内会が頑張るのですが、なかなか頑張れない環境にもなってきています。また、１つの町内会では課題に対応ができない場合やレクレーションもできないというような状況もありますので、そういうときには、地区の連合町内会が活動しながらやっています。

そして、福祉の問題等については、私たちは個人情報の問題等ありまして、対応ができないことがありますので、やはり地域の民生委員の方々との連携、あるいは社会福祉協議会との連携を図りながら、三者連携、三者懇談会という形で研修等を実施しているのですが、これからの時代は町内会の現状を考えた時に、このような連携・連関について考えていかなければいけないと思っているところです。

○小磯　氏

どうもありがとうございました。町内会活動も難しくなってきているなかで、連合町内会の役割が重要になってきているという思いを抱きながら聞かせてもらいました。ありがとうございました。では、畑さんお願いします。

○畑　氏

私は企業の立場から参加させていただきました。今まで委員会は５回程開催されております。そして、先程小磯先生もおっしゃっていましたが、委員は２０名で、その内の１０名、半数は女性でした。私も様々な委員会に参加する機会がありますけれども、これほど女性が多い会議も初めてで、会議では、男性が欠席になると６割、７割が女性で進める回もあったりし、今までの委員会と雰囲気が違ったのではないかと思っております。そのなかで、これまで私が関わることのなかったバックグラウンドを持っている委員からの意見を伺うことができて、私自身も大変、勉強になりましたし、そういった色々な人が居てこの釧路市がつくられていることを、あらためて感じました。そして、この委員会の話し合いで、最初ちょっと難しいと思ったことは、意見を求められたときに各論的な話に行ってしまう。ただ、このまちづくり基本構想はそうではなく、もっと幹の一番太い部分、そこから市の色々な計画が進んで行くという幹を私達が決めるということで、１回目、２回目、３回目と委員の皆さまと話をするなかで、なんとなく意見が集約されてきたと感じています。

その集約された部分が、やはり、まちづくりは人づくりだということでした。まちづくりや人づくり、言葉にするのは簡単ですが、なかなかその人づくりがうまくいかないというのが、長年、色々なことをやってきて、皆さま感じている部分ではないかと思います。特に、

未来を担う子どもたちの時代から釧路が好きになる、釧路を愛する、そして釧路のために自主的に何か活動する。そういった子どもを育てることを一番のベースに考えていく、それが長い意味で一番の近道ではないかということが、この委員会の中で一本筋の通った合意になったのではないかと思います。そして、そのことがまちづくりでもありますし、また、市で色々な活動をしていく一番重要な部分ではないかと思います。そして、企業でいえば、企業の理念、やはり釧路市がどう豊かになって行くか、そして社員ですとか釧路に暮らす人をどう豊かにしていくのかが、やはり理念の一番重要な部分ではないかと思います。

また、そのなかで皆さまと話をしていて、あらためて私が考えたのが、若い方も、私くらいの年齢の方も、もう少し上の方も、今はどういった生活が豊かだと感じるのかという部分です。お金があれば良いのか、それとも都会みたいな生活ができれば良いのか、自然豊かに暮らしていれば良いのか、人それぞれ求めることは違うと思いますが、釧路に暮らしている皆さまにどう豊かだと感じていただけるか、そういったまちづくりをしてければいいなと強く感じました。

○小磯　氏

どうもありがとうございました。それでは、川前さんお願いします。

○川前　氏

北海道教育大学釧路校に勤務しております川前です。よろしくお願いいたします。最初に私は生まれも育ちも釧路市で、小学校から大学までずっと釧路で学んできました。この委員を打診された時に、色々お世話になった釧路なので、ぜひ受けなければと思いながら委員会に出席させていただきました。色々なデータを市役所の方に提示いただいたのですが、あらためて感じたことは、この釧路市には総合病院など医療機関がいくつもあることと、高等教育機関として教育大学、公立大学、短大、高専があるなどの強みを持っています。この二つの機関が専門機関として皆さまの暮らしを少しでも豊かにしているところもあると考えています。

また、第１部でも報告がありましたが、市民アンケートで、釧路市に８７％の方々が愛着を感じているデータがありました。また、中学生のアンケートは５１通でしたが、この中学生の意識を見たときに、釧路をとても大事に思っている子どもたちがたくさんいたことと、将来の釧路をどうにか良くしていきたいという思いを生徒さんが記載していました。このデータを見たときに、とてもうれしく思ったことが今でも印象に残っています。このデータを私たちがどう受け止めるか、この委員会で少しでも反映したいと考えて取り組んできました。先程お話がありましたように、委員会メンバー２０名のうちの半分が女性というのは、なかなか他の会議では味わえない空間ですけれども、本当に日々の暮らしから、あるいは仕事上の活動から、幅広い年代の委員から色々な意見があり、私も新しい学びもさせていただきました。このパネルディスカッションのテーマにもあるようにつながりが、今日の１つの

キーになると思っています。

私は教育という分野から、委員を担っているのですけれども、教育に関わる場面をいかに創出できるかが今後の課題になると思っています。この子どもたちの思いを１０年間の釧路市のまちづくりにどう反映させていくかをお話できたらと思っています。

○小磯　氏

どうもありがとうございました。女性のメンバーの多い市民委員会、実は委員長を務める私もどういう委員会になるのかと随分緊張いたしました。しかも、出席率を見ると女性の方が高い。したがって、雰囲気としては女性メンバーが非常に多い開催でした。ただ、川前さんもおっしゃられましたけれども、前向きな議論、従来にはない新しい感覚での議論は非常に新鮮で、基本構想づくりの中で女性メンバーの意見は、非常に良い結果をもたらしたと感じております。では、夏堀さんお願いします。

○夏堀　氏

クスロという市民団体の代表をしております夏堀と申します。家業のラーメン屋夏掘で勤めながら、市民団体を立ち上げたのが２０１４年です。私がメンバーと一緒に活動していることは、地域の魅力的な人を発掘して発信して、実際に出会えるという企画をして、釧路の中に住んでいる人も、釧路に来てくれる外の人も釧路のファンになってもらうことを目的に活動しています。メンバーの話を少ししたいと思います。私は今３１歳ですが、副代表は高校の時、同じクラスでした。もう一人も同じ学年で同じ高校でした。社会人メンバー４人目は３歳下の江南高校出身の女の子です。この４人の社会人メンバーが中心ですが、みんな住む場所が違います。私が釧路、副代表は釧路市阿寒町、そして３人目の男の子は川崎で、もう１人は札幌に住んでいます。私たちは同じビジョンを持って、釧路で、あるいは故郷である釧路に何か還元したいという思いで活動しています。

実際には編集業務、私たちが取材してきた物を記事として構成したり、それから写真データをまとめてくれたり、デザインをしたり、それからウェブの整理をしてくれたりしています。遠くからでも、こうやって活躍できる時代に感謝しつつ、もっとこの考え方で活動ができるのではないかと思っています。

感想ですが、市民委員会という貴重な場で、私が関わる２０代、３０代ですとか、学生たちの代表だと思ってリアルに意見を伝えています。私たちは心配な事、不安的な事、社会的にまだ弱い人間ですが、医療機関や教育現場、金融機関、福祉とか経済とか、たくさんの専門家の先輩たちがいる中で、伝えられることがあると思いながらお話しています。本当に勉強になっています。

○小磯　氏

ありがとうございました。夏堀さんにはいつも委員会で刺激的な発言をいただいていま

す。それが今回の人選の大きな意味合いであり、特に若い世代の実践的な活動をふまえた意見をありがとうございました。最後になりました。沼尻さんお願いします。

○沼尻　氏

釧路信用金庫の沼尻です、よろしくお願いします。私は策定に携わったと申しましても、市民委員会の委員ではなくて、２９年９月末まで出向で事務局におりましたので、市民委員会の運営をしての感想と、基本構想を策定していくなかで事務局として心掛けたことをお話したいと思います。

まず、今回一番難しかったところは、先程市長からお話がありましたが、これまでの総合計画は、策定義務に基づいて作られていて、このようなことを書きなさいというマニュアルがあったわけです。これらが廃止されたなかで策定するということは、一から釧路市のための計画をつくるということになります。そのような状況のなかで、かつては市民の皆さまの人生モデルが見えていた時代であったと思います。就職をして、家を建てて、退職をして暮らしていく。今このモデル自体が変化しており、どのような人生を歩んでいくのかの選択肢が多様になっていると思います。そのような時代に、地域で共有できるビジョンを作ることは非常に難しい挑戦だと考えています。そのなかで、民間から派遣されている立場で心掛けたこととして、１点目は、市民アンケートや市民委員会の意見に民間の立場で、耳を傾けることです。市民委員会には本当に幅広い年代の委員に参加していただきましたが、それぞれバックグラウンドが違うので、多種多様に議論いただいたと思っています。その中で共通していたのが、やはり地域の人に着目していらっしゃると思います。そして、自身の職や立場を超えて地域の未来を考えておられると感じました。私は、その議論を行政内部に民間の立場で伝える役目が大きかったと思っています。

２点目としては、行政のまちづくりの指針ということで、総合計画と名前は違いますが、市の計画や事業の最上位になる指針です。実際内部で仕事をしてみますと、市長の言葉をお借りすると、庁内は非常に整理整頓されております。これは機能的に仕事をする上で大事ですが、組織が大きければ大きいほど、一職員の仕事がどこにつながっているのか見えにくくなってくると思います。そうなった時に、日頃の業務に一生懸命取り組んでも、地域のどこにつながっているのかが見えにくくなる。一般の会社と違って当期利益をいくら目指しましょうという仕事ではないので、なかなかビジョンの共有というのが難しいと感じていました。今回１０年に一度のビジョンをつくるというところで、庁内の職員の皆さまが仕事をしていくうえで、ベクトルを合わせていく、個々の業務をそれぞれの部署で実施するにしても方向性を一致させないと、最終的に自分のやっている仕事が目指す所に辿り着かないことになります。これはモチベーションに影響することにもなりますので、庁内で共有できるビジョンにしていくことが２点目でした。

３点目が、１点目と２点目に関連することですが、地域のビジョンであると同時に庁内のビジョンでもある。ここが一致していないと、市民が主体のまちづくりですとか、市民協働

を進めても、やろうとしていることが望んだ結果に結びつかない懸念があります。庁内の皆さまに非常に無理を申し上げた自覚はあるのですが、ここのつなぎ役として民間の立場で市民委員会の議論ですとか、市民アンケートの結果を伝えていったところです。そういった意味では事務局としては市民の皆さまにまちづくり基本構想を知って頂きたいという思いがあります。今回もこのシンポジウムに多くの皆さまにご参加いただいておりますが、ここに参加されている皆さまは基本構想を共有して広めていただける同志だと思っております。そういう思いで今日のパネルディスカッションに参加させていただいております。

○小磯　氏

ありがとうございました。今、ご発言いただいた沼尻さん。事務局の立場でパネラーに立つのは、あまり例が無いと思いますが、私は、沼尻さんの役割は、まちづくり基本構想の策定に非常に大きかったと思います。やはり民間という立場で、しかも金融機関に居られたので、幅広い目や情報を持っているなかで、これまで縁がなかった総合計画、まちづくり基本構想に関わっていった。私も色々なやり取りをさせていただきましたが、大変新鮮なものがありました。

さて、私も委員会の委員長という立場なので、委員会に参加した感想をお話したいと思います。これまで委員会なり審議会で委員長や座長などをやってきましたが、今回の委員会は少し雰囲気が違うと思いました。しかも、男性、女性ちょうど半々、世代も若い世代が他の委員会に比べると際立っている。少し懸念していたのは、各論の議論が先行してしまって、まちづくり基本構想ですから総論、いわゆる理念であり、哲学であり、まちづくりの基本に関わる議論に収束するかなという不安があったのですが、これは杞憂に終わりました。女性メンバーの効果、自分の立場の各論にこだわることなく、この委員会は何を議論しようとしているのかに向き合っていた印象があります。今回市民委員会に参加させていただいて協力的な委員会だったというのが私の印象です。それから、畑さんからご紹介がありましたが、議論の中心は、まちづくりはひとづくりではないかという点でした。ところが、考えてみるとこれまでの総合計画は、どこに、何の施設を作るといったハードなプランニングだったわけです。そのなかで人づくりという取り組みに、総合計画である基本構想が、どう向き合っていけばいいのか、これはまだまだ残された難しい命題です。ただそういう政策の方向に今の時代は来ていると思います。人材育成という言葉で置き換えられる部分もある議論だったわけですけれども、そういう人づくりに向けての政策が問われているということが２点目です。

それから３点目は、ぜひご紹介しておきたいのですけれども、５回にわたる委員会の中で、一番盛り上がった場面がありました。それは釧路市民の愛着度です。特に若者の、地域に対する愛着度がこんなにあるとは。私もさっき申し上げましたれけども、この部分をどう受け止めていったら良いのかについて、市民委員会もかなり前向きな議論に展開していったと感じています。これは釧路市にとって重いメッセージだと思います。この部分が、なぜ高ま

ってきたのか。これをどう継続していくかは政策的には一番難しいことです。

それから、最後にお話をしておきたいのは、今日は市民の皆様に、このような場を作っていますが、一番大事なのは、まちづくり基本構想は市役所の基本指針だということです。だから、市役所の各部門の方が、このまちづくり基本構想をしっかり共有していくことに私は尽きると思います。よくパブリックコメントと言いますが、これは厳密に言うとパブリックインボルブメントという関係者を抱き込んで政策を強くしていくことです。欧米でこのパブリックインボルブメントに一番大事なのは内部だと言われます。内部に対するきちんとした理解と内部の声を受け止めて、市役所全体が共有したまちづくり基本構想にしていくことが大事です。今日のお顔を見ると、市役所の方も多いと思われます。ぜひ、都市経営課の仕事だと思わないで、釧路市の仕事だという思いで、今日の議論を受け止めていただきたいと思います。

さて、第２巡に入っていきたいと思います。今日のパネルディスカッションのテーマでも域内連関をどういう形で釧路市のこれからの取り組みにつなげていけばいいのかというところです。日頃活動しておられる紹介等も含めて、発言をお願いできればと思います。これも西村さんからお願いします。

○西村　氏

先程、町内会の現状をお話させてもらいましたが、大きな課題を町内会だけで解決していくことは難しいです。具体的に申し上げますと、交通事故をなくすことを町内会では大きなテーマにしておりますけども、なかなか町内会だけでは難しい。そこで、関係する団体の共通理解を得ながら、情報を共有して共に活動していく考え方、取り組みをしていくことが人口減少のなかでは大事だと考えています。それで、先程説明がありました域内連関はこれからのまちづくりで私は非常に大事な考え方だと思っておりまして、ここで域内連関のイメージのスライドを出していただきました。

私の地域は橋北西部地区連合町内会になりますが、ここは昔、国道３８号線の両側にびっしり色々なお店があったのですが、環境が変わって商店街が潰れてきてしまっています。そういったなかで、平成１７年の１２月暮れの商店街の会合で、昔は事件、事故も無いし、良い暮らしをしてきたが、今、子どもたちをみると不審者に声掛けられたり、あるいは車に乗せられたり、時には殺されてしまうというようなことが全国でありました。釧路でも、不審者が現れているときだったので、その商店街の例会で、子どもたちに、そういった事件、事故に遭わせないような、安心で安全な暮らしが出来る。安心して何でも出来る、勉強が出来る、遊びも出来る、そういう環境をつくるようにしなければいけないという話になったそうです。それは盛り上がって、子どもたちを事件、事故から守る仕組みを作って、活動をしてくれないかというお話をいただきました。連合町内会の青少年部の副会長でもありましたから、大変嬉しかったので、なんとかこれを形になるようにしたいと考えまして、発起人とか会合を持ちながら、平成１８年の３月５日に立ち上げをおこないました。それは「愛と幸

せのネットワーク」という自主防犯組織というような形ですけれども、今申し上げたように、私達のテーマとしては、子どもを地域で見守り育てることなので、今回の域内連関のイメージに非常に似ているので参考にして話をしていますが、テーマのまわりに色々な主体といいましょうか、団体等がありますけれども、「愛と幸せのネットワーク」に賛同してくれた団体は１０数団体ありました。もちろん、子どもを育てるのですから学校やＰＴＡがありますけど、町内会や老人クラブ、あるいは交通問題では交通指導委員会や保護司、民生委員等々、少なくとも皆さまの周りにも１０くらいの団体があると思います。その方々に声掛けて、一緒に子どもたちを守り、育てるというテーマで地域づくりをしていきませんかという訴えをして、共通理解をいただきながら活動をして、今１１年目に入っています。

今、申し上げたように、お互いに今までつながれなかった団体が、この機会に共通のテーマの中でつながりができていく。防犯パトロール隊の組織や挨拶運動など、この橋北西部、東部地区全体が会員になっておりますので、子どもたちが登下校する時間には、まずは外へ出て、「おかえり」とか「いってらっしゃい」とか、そういう声を掛けるようなこと、あるいは買い物などをなるべく登下校の時間に合せるようにして関わってもらうようになってきています。

お互いに連携を深めて、みんなで力を合わせて活動しようということで、それなりに事件、事故もありませんし、不安なこともなくなった状況になってきていることをお伝えしておきたいと思います。それで、委員会で域内連関の説明を聞いて、色々な分野でも同じように連携することができると感じました。災害のこともありましたが、やはり、自助、共助、公助のなかでも、町内会は共助と言われますが、先ほど市長からも報告がありましたとおり、何かが起きてから、すぐに組織を作ることや支援することは難しい。これは、ある人から聞いた話ですが、自助から共助の間に近所があるのではないか。やはり日頃の付き合いである近所を大事にしながら、そして、同時に仕組みも作っていかなければならない。行政との関係でも、災害時の支援者、市民活動もありますので、色々な形で、色々な団体等に入ってもらって、このテーマがより形になるような取り組みを まちづくりで今後進めていきたいと思っています。

○小磯　氏

どうもありがとうございました。日頃の活動をまちづくり基本構想の域内連関という理念、コンセプトであらためて確認していただき、それを新たな展開につなげていこうということかと思います。まちづくり基本構想で議論している域内連関というコンセプトでのまちづくりを実践的に受け止めていただいたお話だと思いました。ありがとうございました。それでは畑さん、お願いします。

○畑　氏

実は、この域内連関と域内循環という２つの言葉を委員会で学んだといいますか、よくわ

からなかったものですから、イメージするのに苦労いたしました。

皆さまも連関とか、言葉はよく聞く言葉だと思うのですが、それが域内と結びつくと、一体どういう意味になるのかイメージできない方もいらっしゃるのではないかと思います。今日は域内連関がテーマですが、今までも産業クラスターなど、業種と業種が結び合って何か新しいことを生み出そうという動きがあったと記憶しています。ただ、あまり活発化していないという現状をふまえて、また域内連関というところで、どうしたらうまくいくだろうかという新たな気持ちで取り組むことも含まれているのかと思います。私が自分なりに理解したなかでこの図を見ますと、地域ですとか、旅行業ですとか、色々な主体から矢印が出ているのが見えると思いますが、実際のところ、この矢印を出すのがすごく難しいと思います。私は運輸業ですが、運輸業の仕事は一生懸命しています。ただ、そこから、第三者的な業種に向っての矢印はなかなか出せないものだと思います。その矢印を、会社であったり、業種であったり、この委員会では人という部分ですけれども、関わっている人が矢印を発信することによって、人と人とがつながって、お互い協力できるのではないか、これとこれが結び付ければ新しいことが出来るのではないか、そういうことがあって、１つのテーマで下のように結びつきが生まれるのを理想にしているのだと思います。

その状況をつくることは、お互いが一歩踏み出して情報発信をするということですが、結びつくことを自主的にすることが最初は難しいと思いますので、行政などのサポートで、結びつきが生まれる、その一歩を踏み出し易くする場づくりが一番大事ではないかと思います。

○小磯　氏

どうもありがとうございました。委員会でも、域内循環、域内連関に関して、色々なメッセージを出していただいて、前向きな議論だったと思います。どのようにつながりを生み出すのかという問いかけは、これからこの基本構想を具体化していくなかで検討していくことかと思います。どうもありがとうございました。それでは川前さん、お願いします。

○川前　氏

教育と人づくりというところから考えてみたいと思います。今日の色々なテーマではつながりが一つの鍵になると思っていますが、このつながることと信頼関係が何によって形成されていくのかという点では、何か一つの事をやっただけでは、関係性は構築されないと思います。直接、間接的な人との交流の積み重ねが色々なつながりに結びついていくと考えます。それは教育という場でも様々な取り組みができるのではないのかと考えてみました。たとえば学校現場においては、西村先生からお話しありましたように、子どもの見守り、ボランティア活動でしたり、町内会では、夏休みのラジオ体操を開催していただいている地域もありますし、神社のお祭りを地域と合同でやっているような地域もあると思います。キャリア教育も学校の先生だけでは、やり遂げられないこともありますので、地元の企業にご協

力をしていただくことも重要です。地域の人材活用ということで、学校の授業に来て頂いて、子どもたちに話をしてもらうなど、教育の場だけではないつながりを生かした取り組みを釧路市内の学校でもやっておられると思います。他にも博物館だったり、遊学館だったり、色々な場面で社会教育施設を用いながら、教育活動に取り組んでいます。子どもたちが青年期を迎えて釧路で働き、住み続けるかは、色々な会社の人たちと関わることも、大事になりますので、この域内連関のところで、色々な取り組みの可能性があるのではないかと感じています。

この域内連関という難しい言葉を理解するならば、この釧路市には約１７万人の人口がおりますが、地域の方々と関わるなかで各団体の顔が見えやすいことが最大の強みだと思います。教育は、子育てだったり、福祉だったり、医療とも結び付きますけれども、誰とつながると、その先に辿り着けるのかが見える点で、つながりやすい地域なのではないかと考えています。この子育てや地域の豊かさを維持、応援していけるような姿を域内連関の中でイメージしていければいいと思います。最初にも申しましたが、釧路市への愛着形成、愛着意識の高さは、地域の皆さまが、知らない人にも気軽に声を掛けてくれるような良い意味での文化がこの釧路のまちにあるからではないかと感じます。本当に様々な職業の方が暮らしているまちですが、大学生たちが釧路以外から進学して一人暮らし、下宿生活をします。そうした若い世代の人達がまちを歩いている時に、釧路市民の色々な年代の方々から気さくに声を掛けてもらえることがすごくうれしいと言います。そうした知らない人にも声を掛けられるような人のつながりや愛着を、これからの釧路の強みとしてもっとつなげていけたら、良いまちになるのではないかと思っています。

○小磯　氏

ありがとうございました。つながりやすさは、この釧路の地域の大きな持ち味だと思います。私は、全国色々なところで生活して住民票を一番長く置いたところが釧路ですが、この地域の最大の魅力というのは、よそ者を温かく受け入れてくれる。その広大さという、つまり、今日のテーマに沿うとつながりやすさがある。ただ、自然発生的に期待するのではなくて、政策的な仕掛けをうまく使って作っていければ、今、川前先生がおっしゃったように釧路の特性を生かしていけるのではないかと感じました。ありがとうございました。それでは、夏堀さん、お願いします。

○夏堀　氏

私は今、様々な人たちの協力を得て地域活動をしています。仕事も地域のお客様にたくさん来てもらって、働くことも、暮らすことも、地域の人たちとつながってやっていると思っています。私のつながりがどのように出来たかというと、５年前にUターンして、１年半ぐらいはお店にだけ一日中居ました。まったく地域活動やまちおこしなんて興味が無かったのですが、お客さんから教えてもらう情報をもとに、そこに行ってみたり、食べてみたり、

やってみたりしてみました。それをお客さんに、「楽しかったです」とか、「おいしかったです」と報告、共有してお客さんとつながっていきました。私はそうやって教えてもらった釧路の良いところを、もっと色々な人に伝えたいと思い、全国に視察に行って釧路の良さを伝えて、そして行った先で教えてもらったことを釧路に還元できないかと考えています。

私のやりたい事は中の人と外の人をつなげて釧路をもっと元気にしていきたいと思っていますが、その目的ができた時に、人のつながりは弱いつながりと強いつながりの二つがあると思いました。私が強いつながりと考えているのは、今活動している仲間たち。同級生や学生さん、地元の先輩、家族です。弱いつながりは、先ほど述べた全国で地域活動やソーシャルビジネスなど地域の良さをお金に変えて取り組んで頑張っている仲間です。この二つのつながりがあって、私は今の目的にむけて活動できているのですが、自分より下の子どもたちとか若い人たちにも、自分の目的とか好きなことを見つけて、それを仕事に変えていくために世界中の人とつながれることを子どもたちに教えたいと思います。

私は今年３月に起業して、少しずつ子どもたちにそれを教え始めていますが、このまちで育った子たちが自分でやりたいことを見つけて、それをお金に変えていくことを、地域の人たちと一緒に取り組んでいきたいと思って、委員会で話をしています。

○小磯　氏

どうもありがとうございました。夏堀さんは、前向きに実践を積み重ねておられていますが、これからも釧路の持ち味、つながりを活用してまちづくりに挑戦してほしいと思います。余談ですが、夏堀さんのお店に初めて行ったのが、釧路で麺友会としてラーメン店が一緒になって色々な取り組みをしていこうということのお手伝いをした時でした。何でこの話を急に申し上げるかというと、ラーメン店が一緒になって、協議会として活動しているのは全国でも例がないと思います。しかもその活動の力は大きく、例えばラーメンフェスティバルは、私が経済効果を試算したことがありますが、７５００万円ぐらいの効果がありました。釧路では、このような他の地域ではできないつながりを実践しています。

さっきも申し上げましたけれども、やっぱりつながりやすい、そういう釧路の特性があるのではないかと感じたので、お話しました。さて、沼尻さんお願いします。

○沼尻　氏

私からは地域経済におけるつながりという観点でお話したいと思います。まちづくり基本構想の中心になる考え方として位置付けた域内連関は、地域のベクトルをあわせて物事に取り組んでいくための理念として提唱させていただいています。私は仕事柄、ご商売をされている方とお話する機会が多いのですが、釧路は何かをやろうとしたときに地域でまとまる力が、他に比べると少し弱いと聞くことがあります。これまで、人口が右肩上がりで増えていて、黙っていても物が売れていた時代は、それでも色々なことがうまく進んできたと思うのですが、これから人口が減少していく時代では、地域のつながりをいかに強めていけ

るのかが強みになると考えています。

一方で、経済界では留意しなければならないことがあります。それは、同業種間は基本的にライバル関係であり、この緊張関係があってこそ企業は成長する点です。域内連関では、何でもすべて手を取っていきましょうということを経済界で申し上げるものではありません。企業活動では、競い合う部分の緊張関係は維持していかなければならないと思っています。そのうえで、例えば、農業分野と障がいのある方の農福連携ですとか、お互いが協力することで課題を解決できる。大手企業の共同配送なども一昔前では考えられなかったと思うのですが、協力することでコストを下げられるなど、幅広い視点を持って連携を考えていくことが域内の連関力を高めていくことにつながると思っています。実現に向けて行動すると、色々な壁にぶつかると思います。これは顔が見える関係だからこそ起きることかもしれませんが、その時に、なぜ今、つながりを持たなければいけないのか、それは地域を次世代に引き継いでいくためであり、そこで働いている方の生活があるからだという理念的なところに立ち戻っていただくために、域内連関を基本構想に位置付けたと考えています。

もう一点、地域における、企業と社会の関わり方は、それが業績や就職に影響するなど、今までになく注目されていると感じています。ただ、「すべてにおいて社会貢献しましょう」というメッセージを出してしまうと、やはり、ご自分の商売もありますし、人も、お金も限られているなかでは難しい面もあると思います。そこで１つの考え方として、地域の課題を解決につながる部分とご商売が一致する部分を考えていただきたいと思っております。たとえば、最近車のアクセルとブレーキの踏み間違え事故に対して、自動ブレーキシステムが開発されたのは、高齢化などを背景とした社会問題にメーカーが対応したことだと思います。そして、それが車を選ぶ１つの基準になって、少なからず業績にも影響しているのではないでしょうか。これは国レベルでの例えですが、地域社会でもこのようなビジネスは成り立つと思いますし、そのような部分を考えていくことが、企業と社会の新しい関わり方になるのではないかと思っています。

これらを踏まえて、これからの金融機関と地域社会の関係性を考えてみました。域内連関のイメージのスライドが表示されていますが、ここに金融機関はおりません。モノを作れるわけでもなく、形あるものを提供しているわけでもない業種の金融機関がどのように関われるかについて、策定側として最後まで難しい問題だと思っていました。しかし、市民委員会の議論では、地域のつながりを生み出すにはコーディネーターが必要ではないかという意見を頂きました。それをお聞きして、これから金融機関に求められるのはつなぐ力だろうと感じています。金融機関の特徴は、複数の市町村を対象とする広域な営業エリアをもっています。それから、色々な業種の方とお付き合いをさせていただいておりますので、地域の情報を多く蓄積しているのが金融機関だと思います。地域に育ててもらった金融機関としては、これらを適切な形で発信し、ビジネスマッチングなどを通してつないでいくなど、地域に還元、活用して地域のつながりを創出していき、そこに必要があれば本来業務として、資金を提供して地域を作っていくことが求められるのだろうと考えています。そのような

取り組みによって、地域の連関力が高まっていければ、今後の変動する経済情勢に対しても地域一体乗り切って行ける強い地域になると考えています。

〇小磯　氏

ありがとうございました。企業という立場、そして金融機関という立場で分析していただきましたけれども、域内につながりを創出するかという点で、金融機関の役割は極めて大きいと思います。金融機関はマネーをあつかうと共に、そこにかかる色々な情報を提供し、地域の活性化に結び付けていく大事な役割がありますので、沼尻さんには、この釧路市で域内連関というコンセプトのまちづくり基本構想の策定に関わって行きながら、地元の金融の場で実践していただいて、経済活性化につなげていただきたいと思います。

さて、今日の議論はひとつの問題提起の場と理解していただければと思うのですが、今日のパネルディスカッションのテーマとして、釧路というのはつながりやすい、そういう地域性を持っているというご指摘がなされた一方で、最後に、個々の企業などの立場から見ているとつながりづらい難しさもあるのではないかと発言がありました。ここをどう読み解いていくかですが、やる気になればつながれる可能性を持っている地域だということです。したがって、これからの大きな目標として、域内連関というコンセプトを掲げていく意味は確認されたのではないかと感じています。私も域内連関の議論に、これまでの経験を踏まえてお伝えしておきたいと思います。まちづくり基本構想の域内連関の議論は、これまでの経済的な域内循環の議論を経済だけではなくて、社会全体の役割、活動、仕組みに展開していく契機にしたいというのが、大きな意味合いだと思います。その意義を理解していくためには、１０年近く取り組まれてきた経済産業分野での域内循環をあらためて振り返っておくことも大事だと思います。そこには私自身が問題提起をした関わりもあるのでお話しておきたいと思います。私が１９９９年に釧路に来たときに、この釧路地域は経済的に大変だと言いながらも、かなり稼ぐ力があって、お金を持っている方が結構いらっしゃいました。ただ問題は、そこで稼いだお金が地域の中で投資され、消費される割合が非常に低かった。それによって結果的に地域経済の財が流出しているというメッセージを出したわけです。ではどうするのかというと、稼いだお金を地域の中で循環させていく、要は、その域内で生産されている物があれば、他の地域で購入するのではなくて、地域内で購入することによって、地域の中でマネーを回していく。お金が回ることによって経済の GDP が高まっていく。そういう地域づくりを目指していこうというメッセージだったわけです。でもなかなか、そこは簡単ではない。そこで私は、もし地域の中で生産されていても、外の方が高品質で安い物があれば、地域の生産者に対して、外でできているのだから、釧路でもそれに見合う物を作ったらどうかという緊張感を持ったメッセージを消費者から生産者に問いかけることが、域内循環の基本だと申し上げた。だから、いわゆる地域で仲良しクラブで使いましょうという話ではまったく無いわけです。自分たちの地域にある生産者に対して、強いメッセージ、厳しいメッセージ出すことは大変難しいことではありますが、つながりを深めるということは

緊張感を持ったものだというお話をさせていただきました。実は、それが経済だけではなく、社会の色々な活動の中でつながりを深めていく際にも大事な部分だと思います。私も域内循環という取り組みでやっていくということを東京などの経済学者の前で言うと、そんな自給自足経済的なことをして、経済の発展があるのかと批判を受けました。それに対して、私はそうではなく、地域の中のつながりを深めていくことが地域の力を強めていくという議論を重ねながら１０数年間やってきました。今、日本全体が人口減少に直面し、他の地域でも域内循環、連関というメッセージが非常に強くなってきています。おそらく今回、まちづくり基本構想のレベルで域内連関というコンセプトを定義してくるのは釧路が初めてだと思います。他の地域では、まだまだこういうことがない。ぜひ、そういう先進的な取り組みだと自覚を持って、取り組んでいただきたいと思います。

それから、パネリストの皆様から貴重なご意見をいただきました。そこで出されたメッセージを私なりに整理すると、西村先生から、日頃の町内会の取り組みで、例えば、子どもたちを見守り、育てる。そういうつながりを深めることで安心な社会が形成していけるというお話がありました。この安心を生むつながりによって、安全を守れる。これは非常に大事なことだと思います。ただ、私はさらに信頼関係、安心と信頼は似ているようですけど、安心は自分にとっての安心ですが、信頼からは、物事を進めるときにお互いのつながりの中で相互の信頼によって色々なものが生まれてくる。その背景には、お互いにそれをやることが、自分も得になるし、相手も得になるし、みんなが得になるという共有感を生むことがなければならない。それをしっかり示していくということが、まちづくり基本構想を具体的に展開していくなかで、スタッフの目標、責任になるのではないかと感じています。たとえば、経済の域内循環でも、自分たちの地域で、その割合を高めれば、釧路全体の経済力が高まるという分析もお手伝いさせていただきました。そうすると、自分たちの目の前の取引によって、地域でお金を回し、地域全体の経済力が高まれば、それは自分たちの家族、子どもたちにもつながっていく。そのような共有感が取り組みを加速させていくことになると思います。だから、域内連関も将来的にみんなが取り組むことで、みんながプラスになるということを示していけるかが重要だと思います。

今日のテーマは「つながる　まち・ひと・みらい」となっております。先ほど開催された市民委員会で議論して、このテーマを基本にまちづくり基本構想の副題を提案していくことで決定しました。今、地方創生では「まち、ひと、しごと」としていますが、キャッチコピーとしたら分かりやすいと感じています。それを今回のまちづくり基本構想では、域内連関のつながりによって、「まち」「ひと」しかも「みらい」という１０年後のまちを見据えていく。私は、大変良くできた言葉ではないかと思います。会場の皆さまにも、今日の議論をひとつのきっかけにして考えて頂きたいという思いをお話して、今日のパネルディスカッションを終了したいと思います。最後まで熱心にお話を聞いていただき、ありがとうございました。

以上